

一例一学

石川 治

石井病院皮膚科／群馬大学名誉教授

皮膚科を選んだ理由

1979年3月に群馬大学医学部医学科を卒業し、当時石川英一先生が主宰されていた皮膚科学教室に入局しました。学生時代はバレー部に所属しており、石川先生は部の顧問でしたので、酒席で一緒にいる機会が多々ありました。石川先生はお酒を飲むのは好きでしたが、あまり強くはありませんでした。そして、お酒が入ると(抑制系が麻痺して)なんでも本音で話してくれました。そうした折々に感じたことは、「この先生にたとえ嘘をつかれたとしても、嘘を見破れる」、つまり、嘘をつくのが下手で正直な先生についていこうと決断しました。「師を選んだ」というのが一番目の理由でした。

二番目の理由は、皮膚科診療の醍醐味です。自分自身の五感で患者さんから皮疹を含めたあらゆる情報

を収集し、その情報を解析して診断し、治療し、治療効果・結果を自分自身の眼で確認できるという自己完結型の診療が好きということです。臨床所見で診断できなければ、生検して組織診断につなげることも容易です。皮疹(マクロ)は組織変化(ミクロ)を反映しているのですから、皮膚科診断学と同時に皮膚病理学を学ぶことは車の両輪です。実際、病理所見を読んで疑問を生じることがしばしばあり、そこから研究テーマを見出すことができました。

あなたは、病理部からのレポートを鵜呑みにして患者さんに説明していませんか？ 患者さんの主治医はあなたです。もし病理診断が間違っているとしても最終責任はあなたが負わなければなりません。百歩譲って、悪性か良性かの判断のレベルであればそれでもよいでしょうが、腫瘍以外の皮膚疾患はたくさん存在します。臨床を理解している皮膚科医だからこそ、皮膚病理を必ず自分自身で読むという習慣を身につけてください。

入局、大学院、そして留学へ

研修医1年目は大学での研修でした。病棟では常に5～10人前後の主治医として、外来では初診医である教授、助教授、講師のバイスタンドを務めました。バイスタンドの経験は先輩医師の考え方、皮疹の診方を学ぶうえでたいへん役立ちました。1年経つころには日常業務をそれなりにこなせるようになりましたが、反面、何か物足りなさを感じるようになっていました。そこで大学院に進学しました。当時は分子生物学が隆盛期を迎えようとしており、この方面の研究を志しました。残念ながら、当時は皮膚科学教室や学内のほかの教室には分子生物学を駆使して活発に研究している研究者はおりませんでした。また、教室内でも教授以下のスタッフで私を直接指導してくれる方がおらず、私の自由に任せてという聞こえはよいので

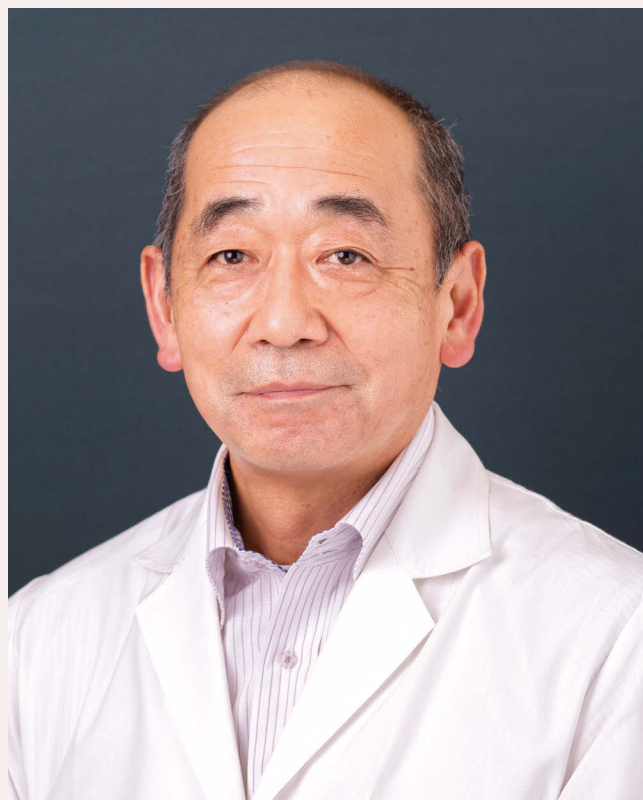


写真1 筆者近影

すが、ある意味で放任主義でした。当時の反省から、私が教授になってからは大学院生には直接指導する講師、准教授を配置するようにしました。

なんとか学位論文を仕上げ、博士課程を修了してから3、4年間、私の中では本格的に研究がしたいという欲求とそれが果たせない鬱屈とした感情が蓄積していきました。そうした折、強皮症研究班で一緒にさせていただいていた東京大学皮膚科の竹原和彦先生(前金沢大学皮膚科教授)から電話があり、「いま、東大からサウスカロライナ医科大学に留学させる人材がないから、石川先生どうですか?」というお誘いがありました。私は即断、「行きます」とお返事しました。サウスカロライナ医科大学リウマチ免疫学教室は強皮症の世界的権威LeRoy教授が主宰されており、竹原先生が留学された教室でもありました。このような機会を与えてくれた竹原先生には今も感謝の気持ちでいっぱいです。人との出会い、人とのつながり(人脈)は大切です。人脈は最大の財産でしょう。

1988年6月に渡米しました。留学生活は夢のような生活でした。日本では臨床と研究をこなすのに8 to 22が日常でしたが、あちらでは臨床がありませんので基本的に9 to 5の日常でした(写真2)。ところが、石川英一先生から、病院長選挙に立候補するから手伝いに戻ってくれとの突然の連絡があり、1年半で幸せな留学生活は終わることになってしまいました。短い期間ではありましたが、研究成果を2編の論文にまとめることができました(もう1年あれば、もっとできたのにという悔しさは残りました)。留学で学んだことが2つあります。1つ目は、外国に出れば出身大学に

意味はなく、ただその人の研究能力と人格のみが評価されるということです。2つ目は、人格は国籍とは無関係ということです。どこの国出身であろうとよい人はよい人ですし、同じ日本人であってもそうでない人はそれなりにいます。

黒船来航

初めてその人物と遭遇したのは、石川英一先生が病院長から学長になられ、主任教授を辞された1992年8月末の研究室の薄暗い廊下でした。その人物はサングラスにアロハシャツ、半ズボン姿の宮地良樹先生でした。「若い!! (着任時40歳)」が私の第一印象でした。私より2歳年上の宮地教授からは、兄貴分として「指導者、教授」たるべき者がもつべき多くのことを教えていただきました(宮地先生はそれを「帝王学」と呼ばれていました)(写真3)。

宮地先生着任前の群馬大学皮膚科学教室は「鎖国」状態にありました。確かに強皮症を中心とする膠原病関連の臨床領域では国内では名が通っていたかもしれませんが、研究分野はとなると「???」というのが偽らざる私の気持ちでした。学外の同世代の皮膚科医たちが何を考え、何を目指して日々過ごしているのか、そのような情報を得る交流機会がほとんどありませんでした。学会等に出席しても他大学の先生方と交流することもなく、石川英一教授の後ろについて学会場と飲み屋を往復するばかりでした。群馬大学皮膚科は「井の中の蛙」であったと思います。宮地先生は群馬大学皮膚科学教室の業績を調べ上げて赴任されました。「外からみていて群馬大学皮膚科は存在感がありません。まずは、群馬大学皮膚科の存在を世に知らしめましょう。そのためには、私が歩く宣伝塔になります」というような意味のことを開口一番に述べられました。そして、「群馬大学皮膚科の先生方の臨床能力は決してほかに引けを取らないのだから、どんどん論文を書いてください……publish or perish !!」。

進むべき方向のみえなかった私にとって、闇を照らす灯台の光がみえた瞬間でした。その甲斐あって、1979～1994年の入局後16年間で教室が発表した原著・症例報告を含めた論文数は英文28編、和文84編でしたが、1992～2000年の8年間で英文97編、和文151編と激増しました。業績が向上したのは、宮地“提督”が教室員の自主性を尊重しつつ、仕事をしやすい環境



写真2 “9 to 5”夢のような留学生活



写真3 宮地教授と中部学術大会にて

を整備してくださったおかげです。宮地提督は鎖国状態であった群馬大学皮膚科を開国へと導いてくれました。

宮地教授の在任中、「宮地先生と石川先生は日本の皮膚科教室のベストカップルだね」というお言葉を幾人かの先生方からいただきました。宮地教授がどう思われていたかはわかりませんが、私自身は「水を得た魚」のようでした。蓄積していた基礎および臨床の研究アイデア、症例を堰を切ったように論文化しました。

宮地先生は群馬大学を開国し、教室としての本来の環境を整えた後、1998年4月に京都大学皮膚科教授として凱旋されました。私は幸運にも宮地教授の後任として1999年4月に母校の4代目皮膚科教授に就任することができました。宮地教授に出会わなければ教授としての私の人生はなかったと思います。宮地教授直伝の帝王学の中、私が教室運営の基本方針としたことは、「機会均等、評価は厳格に」です。アルバイトばかりやっている医師と、臨床・研究に没頭している医師とを同列に扱ってはならず、努力した者が報われる組織にしなければならないと考えました。努力している者を評価することは上司の重要な役割の1つです。

教授就任以降

1999年4月～2020年3月までの21年間、主任教授を

務めました。どこの大学も同じだと思いますが、教授になるとさまざまな会議や学内の任務が増えます。教授就任3年目から医学科教務委員長を8年、病院長(病院担当理事)を4年、そして教育・国際交流担当理事を4年、それぞれ務めました。教務委員長は医学科内での業務ですのでさほど難はありませんでした。しかし、理事となってからは他学部メンバーとの交渉、折衝も多くなり、学部固有の歴史・文化に根差す異質な考え方には驚かされました。学長以下執行部に確固とした未来へのビジョンとそれを実現しようとする強い信念と遂行能力がなければ、常に妥協の産物しか生まれないことを目の当たりにしました。同時に、中央省庁の掌で踊らされる地方国立大学の悲哀と限界を学びました。

臨床系教室の教授の臨床能力が劣っているのは教職員ばかりでなく、受診する患者さんに不利益をもたらします。教授就任以降、自分に課し守ってきたのは週2回の初診外来、週1回の組織検討会と外来および病棟回診でした。自身の臨床能力を維持・向上させ、後輩医師に私がこれまでに経験し、学び蓄えてきたことを伝えることを目指しました。とりわけ、個々の症例から学ばせていただくという「一例一学の姿勢」を強調してきました。これは、一期一会の精神で診療にあたらなければならないという自戒を込めた私の造語です。後輩医師に一番に伝えたい診療態度です。



写真4 最後の病棟回診を終えて

最後に

私は留学時を除いて、40年余りを大学での皮膚科診療に携わってきました。とくに、教授就任以降は診療の全責任は最終的に私にあるという覚悟をもって診療にあたってきました。研究に関しては非才であることを自認していましたので、大学院修了者は積極的に国内外のほかの教室に留学させ、教室にはない新しい分野の知識と実験手技を学ばせ、教室の研究指

導者となれるように配慮してきました。その成果は定年退官前の5年間で如実に表れたと自負しています(写真4)。

最後になりますが、41年間の大学生活では学内外の多くの先生方にご支援、ご助言をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。これからもお目にかかる機会があると思いますが、その際は気軽にお声をかけていただけると嬉しいです。